
我が家の愛犬が死んだ。 - 火葬の後に -

朝倉岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家の愛犬が死んだ。

[۲۱۷]

N 4 7 0 4 B A

【作者名】

朝倉岳

【おひさま】

1月10日。我が家のマスコットであつた愛犬が亡くなりました。家族同然に生きてきただけに、その死を受け入れるには重かつたです。この作品は、家族の死を前にして、私が泣きながら書いた日記帳のようなものが内容となっています。あなたは受け入れられますか？家族に対してやり残したことはありませんか？

(前書き)

我が家の大愛犬が1月10日に亡くなりました。

名前はムサシ。雑種犬で、年齢は十五歳でした。

ペットといえど、その存在は家族と同じぐらい大きなもので、私が初めて「家族を亡くす」という事実に触れることとなつてしましました。

「生前に色々やつておけば良かった……」

その後悔は、死を目の前にして初めて実感しました。

生前の家族のことを泣きながら書いたのがこの作品です。日記帳みたいで見づらいところもございますが、もし読んでくださる方がいるなら、もう一度、家族のことを考えてみてください。

- 1月9日。異変。

執筆日・1月9日。（午前9時。ムサシはまだ歩き回っている）
（う）

泣きながら書き物をやるのはいつ以来だろ？
でも書かざるおえない時が来てしまった。
いまさらになって書くことがどれだけバカらしいかは自分でも分
かるし、
それがどれだけ悲しいことかも分かっている。

我が家の大愛犬であり家族でありマスコットでもある、
ムサシの様子がおかしくなったのは昨日のことだった。
十五歳の雑種犬である。

生憎（今思えば悔やまれる）、
昨日は友人と遊びにでかけておりムサシに気をかけることができ
なかつた私だが、

母の話によると、昨日からいつも食欲が無く、散歩も手こじたえが
ない感じだったという。

その話を聞いたのが遅すぎる深夜十一時半のことだった。

暗い外を見てみると、まず異変に気づく。

たどたどしい足つきで、庭をグルグルと回っているのである。

頭は地面の匂いを嗅ぐかのように低く保ち、前傾姿勢のよつたな形
で歩く。

あきらかに体勢がおかしい。

確かに散歩のときは、好きな匂いがあればそこから十分以上も離

れないこともあつたが、

それとは明らかに様子が違つ。

何かに取り付かれたかのようにゆつたりと徘徊しているのである。そもそも、深夜なら老犬であるムサシならとつぶに寝て いる時間でもあつたし、

ともかく何かが起つたことを私は肌で感じ取つていた。

ホームページを検索すると、痴呆犬や脳腫瘍などのキーワードが出てきた。

少しだけポジティブになれたのは、右回りの旋回は痴呆犬に多く、左回りは脳腫瘍の疑いがあるということで、ムサシは幸いにも右回りだつたからだ。それでも、あの元気な姿とはほど遠い。

年齢で言えばおじいさんは言え、

この前まで元気に走り回つてたやつが

急におじいさんの動きになるなんて耐えがたいことだつた。

うるさくて、元気が良くて、やたら物を食いたがる姿に戻つて欲しいといつ

人間のわがままが支配した。

私は、

「老犬だから、いつ死んでもおかしくない」とこいつことを最近になつて軽口で言つていたものの、

流石に受け止めきれなくなつていた。覚悟できてるつもりでも、やつぱり覚悟なんてできなかつたのだろうか。

余談になるが、近所にある竹馬の友の家の犬は、脳梗塞の状態から復活し、走れるぐらうに回復しているという話を思い出した。

2時半まで様子を見た後、

「朝になれば変わるかもしない」という思いを胸に抱いて寝た。

人間とは単純なのか、それともよくできているのか知らないが、
その日に私が見た夢はムサシが庭でハツキリと元気な顔を見せた
夢だった。

人間つて身勝手でズルい。

翌日（1月10日）

夢のせいでも気分は悪かった、というか悲しい気持ちに拍車がかかった。

もうムサシがどうなつても私は泣くな、と思つた。

それが嬉しく泣きか、それとも悲しく泣きかは分からなかつたけど。

朝の七時に起きて一縷の望みを託して外を見てみると、ムサシの様子は変わってなかつた。

まだグルグルと旋回して歩いているだけだつた。

そして、何が私の気がかりだつたかといえば何も食べたり飲んだりしていないこと、

毛ヅヤが失せてボサボサとした手触りになつたこと。

そして、昨日は右旋回だつたにも関わらず、

今日になつて左旋回になつていたことだつた。

インターネットでは、脳腫瘍や痴呆犬は、結構力弱い声で鳴くと書いてあつたのだが、

ムサシが泣き声を上げない分だけ寂しくも感じられた。

私はすぐに手持ちのハンディでヨタヨタと歩くムサシの姿をカメラに収めた。

せめて元気なときに撮影してやればよかつたとも思つが、もはや後の祭りである。

震災のときもさうだが、カメラに収めておけば、と後悔した。

人間の記憶なんていつか風化するし、人に批判されようと撮影をするべきつた。

それは震災の爪あとを面白おかしく撮影するんじゃなく、自らが鮮明に思い出せるように。たぶん元気づいたからである。

そしてそれが死者への弔いでもあること元気づいたからである。

少し話しがそれだが、ムサシがまだ歩けて良かつたという気持ちと、

せめてもう徐々に体調が崩れていればまだ元気な姿が撮影できたのに……

という矛盾した考えを持ったままカメラを回していた。

しかし、私のことが微かに分かるのか、私が庭へ出ると私のほうを見た。

そして、確かにこっちへと歩き出そうとしていた。

しかし、足はおぼつかず、結局旋回運動に戻ってしまった。

何が悲しいかというと、私という存在を認識してくれただけで、私は嬉しいという感覚を持つてしまっていたことだつた。

私と母、家族は何となく分かっていた。多分、ムサシは助からないだろう、ということに。

母は「かわいそう、かわいそう」と言つて涙目だつた。私も涙目だつた。

これを書いている最中（9時42分）にムサシが抑揚の無い声で鳴いた。

最後の力を振り絞つて地面に倒れたらしい。まだ息はあるので、小屋に寝かせた。

今後どうなるか分からない。

けどこんな時くらい、コイツのことをしつかり思い出そう。

細かいことは間違えているかもしねなにかど、とにかく黙こ出せ
るところだけ書こう。

震災で仲間が死んだとき、私が一番の弔いになると黙つたのを、
思つ出すこと。

そして、忘れずにそここの余韻をあることとが弔いになると黙つて
るからだ。

罪なのは忘れる」と。そして、無かったこととする」と。

ムサシという犬

ムサシが我が家に来たのは私が小学4年のときぐらいだったと思う。

私の兄が「犬を飼いたい」と言い出したのがキッカケで、幸いにも我が家にはそこそこ広い庭があつたし、犬を飼う条件はそろつていた。

何件か動物ショップを回った記憶があるが、

結局知人か誰かの家の犬を引き取るという形で格好がついた。

その家には犬が何匹かいて「うちの犬の一匹」「うちの一匹を引き取ってくれ」、

ということで兄と弟（つまり私）で好きなほうを協議することになった。

現在我が家のマスコットとなつた愛犬を選んだのが兄で、私はもうすこし年老いた犬の方を選んだので意見が分かれたが、当時まだ小さかつた子犬のかわいさに最終的にはやられて收まりがついた。

その後、車で家まで帰る最中に何が困つたかというと、名前である。

母、兄、私で意見を出しだがまともらず、途方にくれていた。そんなとき、車内でちょうど空前のブームであつたポケモンの話を兄としていて、

分かる人には分かると思うがロケット団のムサシというキャラクターの名前を聞いて、

母が「それが良い!」ということで折り合いがついた。
それがムサシという犬が誕生した瞬間だった。

家に帰つて庭に放してみたものの最初は「ひるをかつた。

まず知らない家族とともににするのにムサシは、まだ抵抗があつたからだらう。

ムサシは明らかに落ち着かない様子でクウーンクウーンと鳴いていた。

その次は、首輪。

前の家では首輪をつけておらず、こぞ我が家でつけてみると明らかに嫌な反応を示され、

これまた庭で鳴いていたのも覚えている。

しかし、それを過ぎればムサシはうちの家族としてすっかり定着した。

知らない人が玄関に来ればワンワン吠える番犬っぷりと、それでいて普段はそれなりに静かという今思えば優秀な犬だつた。多分だが、アイツは自分の役割がこれだと思っていたのかもしれない。

ワンワン言つのが「ひるをかい」と思つた時期もあつたが、アイツはアイツなりの仕事をこなそつとしていたのかもしれない。

そんなこんなで体も成長し、私が小学校を卒業する頃には立派な犬になつていたような気がする。

基本的には母や父が散歩に連れてついていたが、ようやく慣れてきた私もようやく一人でムサシと散歩に行けるようになつたし、

餉なんかも与えるよつになつていた。

中学時代には、ムサシの筋肉もすごかつたし、散歩では私を引っ張るぐらいのパワーを持った犬だつた。

今思えばあのあたりが元気というピーカーに差し掛かっていたのかもしれない。

そして、現在私が大学を卒業する頃になるのだが、あまり特別だったイベントは無かつたように思える。アイツがしたことは私が学校へ行くとき見送ること、そして我が家に帰ってきたときに一番に迎えてくれること。しかし、私は、それを悲しいとは思わない。それだけ家族の生活の中に自然調和した結果だと思つし、みんな違和感なく生活できていた。

何となく家族の精神的支柱にある存在、ペツトってそれでいいんじゃないのかな。

当の本人がどう思つているかは知らないけど。

でも、きっとアイツも同じ気持ちなんぢゃないのかな。

学校から家に帰れば、一番最初に顔を見せるのは決まってアイツだつた。

もし言葉を話せるなら聞いてみたかった。

「お前はこれで幸せなのか。満足しているのか」って。時間は現在、午前10時半。
どうなるのだろうか。

- 1月10日、その後。生命のマラソン。

1月9日（日誌の続き）

午前10時40分。

ふと、小屋で横たわっていたムサシが立ち上がった。陽が入ってきたからだろうか。一瞬だが元気な姿を見せた後、また旋回運動をし始めた。

朝よりも足取りが軽く、明らかに回復している……とまではいかないが、

ともかくまだ歩くだけの元気はあるらしい。

そういえば夜中ずっとグルグル回っていたのなら、体力的に朝で限界だったのだろう。

さつき横に倒れてから回復したのか。

午前11時40分

また倒れた。

本当に足がおぼつかないらしく、細かい段差ですら登れなくなっている。

旋回運動で繋いだチエーンが絡まつたのを直そうとしたら、後ろで倒れた。

小屋に移動させ、毛布をかけて横にした。息はしているが、時間の問題のような気もする。

もし人間だったら「死ぬな、頑張れ」って声をかけたかもしれない。

けど、それでもアイツは歩いていた。痛々しく。それを見れば分かる。

アイツは頑張ってる。頑張って歩いてる。

だから、頑張れなんて声かけられないし、死ぬな、なんても言えない。

私が言う資格なんてどこにもないんだって。

泣いている母に「仕方ない、仕方ない」ってずっと私は言いつてるけど、

何が仕方ないのか自分でも分からなったりする。歳が？病気が？運命が？何が仕方ないのか。分からない。

午後5時

アイツはまだ頑張っている。

一時間歩いては倒れ、また一時間寝ては歩くを繰り返しを今まで繰り返している。

しかし、明らかに時間が経てば経つほど元がおぼつかなくなっている。

正直、すさまじい生命力だと感心もしているが、本当に時間の問題であることも認識している。

人間で例えるなら、朝から何も食べずマラソンし続けているようなものだ。

給水も食事もとらないまま、生命のガソリンが続く限りアイツは歩き続けるだろう。

何がアイツをやめさせののだろうか。フリフリの足を動かし続けるのは何なんだろう。

午後7時

夜になると、ムサシは小屋で寝たままになっていた。

再び歩く気力を溜めてるのだろうか。息はまだ続いている。

こんなこと言うのもなんだが、もうアイツは良くやつたと想つ。正直、朝に倒れた時点では私はもうダメだと思っていた。

それから半日以上。アイツは生き続けた。

だから、もういい。家族もそう思い始めていた。

もういい。ここまで生きてる時間を延ばせただけでいい。

だから、せめて安らかに眠ってくれ、と。

午後11時15分。

母が小屋を見たところ、ムサシは息をしていないらしい。いつから息をしていなかつたのかは分からないうが、ともかく息は止まつてゐるらしい。

死んだのだろうかそれも分からない。

何となくそれを見るのが嫌なので、今いつやつて書き物なんかをしてゐる。

今、ここで死んだ、死んだと騒いでも何も変わらない。そんなの朝の時点で私は覚悟できていたから。

ここでも私の口から出るのは「仕方ない」ばかりだつた。

多分・・・明日の朝、確認した後、ペット用の葬儀関係者に連絡を入れることになるだろつ。多分。

午後12時。

私は、結局ムサシの小屋を訪れていた。寝れなかつたからだ。ムサシの口はだらしなく曲がり、目元には涙の痕が残つていた。間違ひなかつた。

- 1月11日。火葬。

1月10日。

午前は、学校があつたので早く家を出た。
もちろん、そんな気分でも無かつたのだが。
ペット葬儀場が混んでいたら、明日以降になるかもしないという
話があつたのだが、

俺が帰つてきたときには庭のチョーンも外され、
小屋も毛布などがすつかりと無くなつていた。

薄々気づいていたが、愛犬は骨になつていた。
白い壺に入つたまま。

頭蓋骨らしきものがドンとそこにあつた。

怖くは無かつた。

ただの亡骸としか感じなかつた。

両親に話を聞くと、午前中にそれらを全て行つたらしい。
「15歳という年齢の割には、丈夫な骨でした」と
葬儀担当者が言つていたらしい。

そりやそうだ。アイツは体力の続く限り頑張つた。
むしろ、俺はアイツの体力に驚いた。

少なくとも俺が諦めた時間より10時間以上は生きていたのだから。

墓は、庭の隅に作られることになつた。

そして、犬はもう飼わないということを母に告げられた。
けど、ガランとなつた庭は、あまりに寂しかつた。

当たり前の存在が、当たり前に存在することはとても重要である。
そんなことはずっと前から理解してたつもりだつたけど。
けど受け入れるには少し重すぎるようにも思える。

だから、もう死ぬな。

誰も死ぬな。誰一人として死ぬな。

悪人だろうが善人だろうが、恨まれてようが、他人だろうがそんな
ことはどうでもいい。

だから、もう誰一人として死ぬな。それが犬だろうが人間だろうが
関係ない。

生きるとこままで生きる。

死ぬな。頑張れ。

きっと、誰かが悲しむ。

悲しむ存在がいる。

そして、死んでからじゃないと気づけない。

死ぬな。

死んでいい存在なんて本当は無い。

普段、死んでくれと思う人だつて、いざ死ねば誰かが悲しむ。

それを忘れない。

だから死ぬと決まついても死ぬな。

死ぬまで生きてくれ。

我が愛犬のように。火葬の後。

- 1月11日。火葬。 (後書き)

最後まで、拙い日記のよつたものを読んで下さってありがとうございました。

私も3・11の震災にて仲間を失いましたが、弔うことは、口に出すこと。口に出してあげること。罪なことは、忘れることだと今も思っています。

もし、その時にその人のことを話せる内容、もしくは思い出せる物。みなさん、持っていますか?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4704ba/>

我が家の愛犬が死んだ。 -火葬の後に-

2012年1月12日22時00分発行